

李良枝

かすみめ

講談社

すきめ

良枝

かずきめ

一九八三年九月五日 第一刷発行

著者——李^イ 良^{ヤン} 枝^ジ

© I Yangji 1983, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三三 郵便番号二三 電話東京〇三九四一三三(大代表) 振替東京八〇五三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一一〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

目次

かずきめ 5

ナビ・タリヨン 85

あとがき 205

装 版
幀 画
菊 秋
池 山
薰 静

か
ず
き
め

か
ず
き
め

長く伸びた土手には人影が全くなかった。辺りの空気は力なく地面にうつ伏し、風の氣配さえない。彼女は空腹と疲れ、そしてまだ残っている病み上がりの微熱でふらふらしながら歩いていった。太陽は切れ切れの雲の間で楕円形に揺らめき、河床を見下ろしても流れを忘れてしまった泥水が澱んでいるだけだった。

行く手にコスモスが群になって咲いていた。彼女はコスモスの前にしゃがみこんだ。半ばまどろんでいた彼女の背筋に冷水を浴びせるように風が渦巻き立った。細い茎をたわませ風の余韻を撫で合っているコスモスを見つめる。手を出して折るのでもなく、ただじつとコスモスの花に見入る。彼女は思いついたようにスカートの裾をめくり、履いている運動靴の前に突き出した。今朝初めて履いたばかりの運動靴は歩きくたびれた彼女自身と同じように埃だらけで、プリントされたコスモスの花びらは色があくすんでいた。うつ向いた襟足の辺りが重くなる。疲れが、両眼の隅からしのびこむ眠気とともに全身をしびれさせ

る。彼女は立ち上がり、コスモスの群を掻き分けて土手を降りると草の上に横たわった。なだらかな土手に生い繁った草が背中をひんやりとさせ、いつの間にか寝息をたてていた。

家の玄関の沓脱ぎの上に身体を打ちつけるようにして彼女が倒れたのは、一週間前の月曜日だった。学校で三時限の授業中にふいに頭が朦朧とし始め、臉に力がなくなり、足や手が震えだした。額に汗が流れ、重くなった首が支えきれずに机の上にながたとうつ伏した。担任の教師が走り寄って彼女の額に手をあてた。保健室に行こう、と言って抱き上げようとした教師の手を彼女は押しのけ、このまま家に帰ります、と吐き出すように言いながら立ち上がった。彼女は無言のまま教室を出た。辺りを無視しきったその態度に、教師も生徒も呆然として見送るだけだった。教室の情景も囁かれる声も、漂う水の中に屈折して遠のいていくように思えた。校門を出て家の方に道を辿りながら、途中何度か電柱にもたれかかり、糸あやつりの人形がふいに糸を切られてしまったように路傍にうずくまった。そんな彼女を立ち上がらせ、歩き続かせたのは、その日初めて知った自分の中のある力だった。

すでに二週間以上も前から、彼女はその日の四時限目の授業を呪っていた。実際は小学校四年生に進級し、新しい社会科の教科書を手にした時から動揺は始まっていたのだが、坂井という教師の性格を観察し、進度を計算してはつきり二週間後の月曜日にあのページを勉強するはずだと確信した時、彼女の小さい身体はよじれ始めた。

伝染病が発生して学校閉鎖になる、大地震が起こる、前夜に雷が落ちて学校が燃え上がる、坂井が急病で倒れる……さまざまに考えを巡らせても、現実感のない想像はかえって彼女を不安に落ちこませた。たとえ月曜日の授業がなくなったとしても、あのページはいつか必ず開かれることになる。彼女自身が仮病になって学校を休むのが一番確実な方法に違いなかった。だが一日中家で寝ていることの苦痛を思うと、小さな身体はまるで棒杭のようにすくんでしまうのだった。

左顎の下にピンポン玉ほどの瘤が突き出ている継父は何かにつけて母を怒鳴りつけ、暴力をふるった。母はその時々によって黙ってされるままになっていたり、泣きわめいて継父に抗ったりした。仮病を使って家にいればそんな継父と母の姿を見なければならず、いつなとき、継父が彼女のことを喧嘩の口実にしないとも限らなかった。

社会科の教科書のあのページには〈朝鮮〉という文字がいくつも印刷され、朝鮮半島の略図までが載っていた。書かれてある内容以前にチョーセンという響きが彼女をすでに怯えさせていた。母の再婚とともに昨年転校してきたばかりの彼女の出自を級友たちは知らないはずだった。だが日毎に脹らんでいく形のない不安や圧迫感は、蜘蛛の巣のように粘つく彼女にまといついた。

彼女はたいていの大人の気持ちとは、その後ろ姿を見ただけでも読みとることができるような気がしていた。大人であれば全部が全部偉いわけではなく、大人にも性格や能力の差があるのだということを漠然とだが知っていた。だから教師の一挙一動にただの一人の大人を感じ、その教師の家庭生活まで想像していた。彼女にとって級友たちの方がかえって恐ろしい存在だった。彼らの不意打ちやしっぺ返し、陰口や妬みの意外さを彼女はどうしても読みとれなかった。月曜日の四時限に自分は坂井と級友たちに板挟みにされる……彼女は震えながらその日の自分の姿を思い描いた。

月曜日が来た。家の中は朝からざわめき、人の足音や掛け声で湧き立っていた。仮病になって休もうと、眠らずに決意した彼女は氣勢をそがれてぼんやりとしていた。その日は

家の裏側の空き地に建てることになったアパートの建て前だった。土木事務所を經營する継父の手で設計も實際の工事も始められ、継父はいつになく上機嫌だった。台所では母が近所の主婦と一緒に忙し気に立ち働いている。建て前という晴れの日に病氣だと言いだすのはどうしても気がひけた。彼女はしかたなくランドセルをしょいあげた。

急に熱が出て四時限目の授業を受けずにすんだことがどうしても不思議だった。校門の石柱が陽炎の中にぼっと揺らめいて消えた。そして曲がり角でまた力なくぐにやりと地面にしゃがみこんだ。立ち上がろうと自分を鼓舞はしてみても、身体のどこかに隠れているある力の不気味さ、その偶然さに氣圧されてしまうのだった。彼女はようやく、通りのすぐ右側に家の門が見えるところまで歩いて来て意識を失った。そこからどうやって玄関に辿り着き、引き戸を開けたのか覚えていない。沓脱ぎの上に崩れおちた彼女の肩を揺さぶる誰かの手は感じた。そしてその時から全く夢と区別がつかないものになっていた。

原因が解らないと言って医者が解熱剤を射って帰って行った後、母はお祓いの老婆を呼んだ。建て前の日取りが悪かった、アパートの便所と玄関の方角が悪かった、とわめき立てる母に継父もしかたなく従っていた。彼女は老婆の振りかざす御幣が白い動物のように

自分の身体の上を跳びはねるのを見た。呻くような老婆の声に時折、き、き、き、と心臓を刺す奇妙な音が混じり、その都度、煮えたぎる鍋底に沈んでいく自分を感じた。彼女は起き上がるうともがいた。だが声は出ず、手足が硬く貼りついたようになっていて動くことすらできないのだった。老婆は彼女の顔を覗き込み、御幣の白い束を胸や頭に容赦なく打ちつけた。

閃光が走り、ふいに眼球がじゅっと灼かれるような痛みを覚えた。老婆の顔も寝ている彼女をとり囲んでいた家の者たちの姿も消えた。目の前が真っ白な膜で覆われ、それが眼球を刺し通すほどの強烈さで輝き始めた。彼女は瞬きできずに目を見開いたまま、身体を硬直させた。足先から血管という血管が波打ち始め、耳の中が水で塞がったようにあらゆる音を閉め出した。どこからか低い唸り声が聞こえてきた。間伸びしたその声が発せられるたびに、目の前の白い膜が微妙に揺れ、声の強弱に合わせて陰影を作った。

へ出て行け、水の中に出て行けへ

同じ言葉が三度繰り返された。彼女ははっきりとその言葉を聞きとり、反芻した。白い膜は何の前触れもなくずっと消えた。しばらくの間、彼女の目はぶれてぼんやりとしてい

た。やがて焦点が定まり、天井の木目一つひとつを迎えるようになっていった。熱が下がり始めた。波打っていた血管が次第に静まっていき、彼女は昏睡状態に入った。

柔軟でとりとめがなく、それでいて身体を四方八方から圧迫する奇妙な感覚に浸っていた。自分は今、水の中にいるのだ――。辺りが少しずつ明るくなる。身体がゆっくりと引き上げられる。足首を締めつける水から足を抜きとるように思いきり力を入れて、彼女は水面に向かって身体を伸ばした。

寢床の周りには誰もいなかった。あれほどの高熱が嘘のように下がり、彼女は牙え渡った頭でしばらく天井を見つめていた。身体を起こし、蒲団の周囲を見回す。氷嚢が枕許にころがっている。氷は溶け、生温くなった水がゴムの柔かい感触とともに手の中で揺れた。雑然とした部屋は長い間、彼女の具合いを家の誰も見にこなかったことを悟らせた。彼女は汗まみれのシーツを取り替え、寝巻を着替えるとまた蒲団の中に入った。いくらでも眠れそうな気がした。目をつむると夢の中で聞いた、あの低い唸り声がまた背筋の辺りに甦えった。

その週いっぱい学校を休み、月曜日の今日彼女は家出する決心をして蒲団をたたんだ。

昨日、彼女はコスモスのプリント模様のある運動靴をねだった。彼女にとって物をねだるのは初めてのことだった。

鼻先で草がかすかな音をたてている。どれほど時間がたったのだろう。彼女は土手に横たわっている自分に気づき、身体を起こすと湿った服についた草の葉先や土くずをはらい落とした。草を掴みながら土手を這い上がった彼女の頭上に灰色の濃い雲が一面に拡がっていた。何故こんなところまで歩いて来てしまったのか、と記憶を辿り始めた彼女は、ふと尿意を覚え、また土手を降りて行った。土の中にくいこんだ石に右足をのせてスカートをまくり上げる。下着を下ろしてしゃがみこむと尻に草の先が触れた。それがこそばゆく身体を少し動かしたとたん、右足を支えていた石が土からはがれてころげ落ちた。彼女は重心を失い、前のめりになって河の方に滑っていった。流れがなかった河床は思ったよりも深く、膝から下がすっぽりと泥水につかって止まった。ほっとした瞬間、生温い小便が両脚の内側を伝って泥水の中に流れこんだ。

注意深く土手を這い上がり、路傍に顔を出す。遠く前方でこんもりと繁る杉の林が見えた。杉の林の周囲には黒々とした雲が音をひそめてけむっていた。雲と杉の林が作る不気